

## 研究ノート

フランツ・ヴェルフエル  
『バルバラあるいは敬虔』  
——自伝と小説——

猪股正廣

フランツ・ヴェルフエル Franz Werfel の Barbara oder Die Frömmigkeit 『バルバラあるいは敬虔』は、最初の長編小説 Verdi. Roman der Oper 『ヴェルディ、オペラの小説』から5年後の1929年に発表された彼の2番目の長編である。ノルベルト・アーベルス Norbert Abels の年譜によると、この年にはウィーンのユダヤ人社会から離れ、アルマと結婚したとも記されている。アルマの最初の夫、グスタフ・マーラーもユダヤ系だったが、彼女はユダヤ人なしには生きられないものの、宗教社会集団としての彼らがどうしても好きになれないために、夫がそこから離れることを求めたのである。ヴェルフエルは形の上では、その求めに応じた。内面はどうであったかは、推し量るしかないが、少なくとも作品の上では、その後もユダヤ教を否定することはなく、キリスト教との共存の道を模索し続けたように思われる。キリスト教については、幼い頃から乳母バルバラに連れられてカトリック教会のミサに通って馴染んでおり、最初に入った学校もカトリックのピアリスト修道会学校であった。ユダヤとカトリックは、自分の成長の過程で二つながら根付いている、宗教の歴史が

示すようにそれらは母体と子のようなものであり、カトリック教徒のアルマと結婚してうまくやれないはずがない、というのが当時の素直な気持ちだったのであろう。はたしてことはそれほど単純ではなく、この問題では結婚生活上も生涯にわたって苦勞することになるのだが、そのおかげもあって宗教的な作品を書かざるをえなかったのだとすれば、アルマはたしかに芸術の女神だったのかもしれない。この結婚の年に当たって、自分のために、そしてアルマのために、これまでの己の半生を振り返る必要に迫られ、小説を書いた、自伝ではなく、小説を。そこには事実として書くのは憚られることでも、小説としてなら書けるという判断があったに違いない。こうしてできあがった自伝的小説には、当然事実と虚構が混在しており、それは作品の構成にも影響を及ぼしている。そのあたりの事情を作品の概要から見ていこうというのが、本稿の差し当たっての目論見である。

小説は大きく4部の「人生の断片」に分けられており、その各部がさらに第1の人生断片は16章、第2の人生断片と第3の人生断片は各15章、第4の人生断片だけは5章から成っている。その目次と各章のタイトルをここに訳出し、その内容の論者による要約を括弧内に記し、頁数は原書各章の開始の頁を示す。

## 第1の人生断片

### 第1章 何処から？ 何処へ？ 11頁

(地中海を航行する豪華客船の船医フェルディナントの控えめなたたずまいに、乗船していた55歳の作家ソーニンが興味を引かれる)

### 第2章 内面生活 15頁

(フェルディナントが幼年期を回顧し始める)

## 第3章 大佐

20 頁

(フェルディナントの父は砲兵連隊の大佐だった。兵舎に子供を連れて行く子煩悩ぶり。そして家には母と乳母のバルバラと使い走りの青年ヴォイタがいた)

## 第4章 1枚の写真と傷ついた感情

27 頁

(船医フェルディナントのもとに母親の昔の写真が送られてくる。その表情には、いつも自分より乳母に愛着を示した息子に対する不満が浮かんでいる)

## 第5章 火をおこす女性

33 頁

(バルバラは朝一番に起きて、台所の火をともし、家族の朝食を用意し、暇さえあれば教会に通う信心深い女性だった)

## 第6章 8月18日

37 頁

(この日はフェルディナントの誕生日であると同時に老皇帝の誕生日でもあって、国の祝祭日。その日をどう過ごすかについて、繰り返される両親の諍い)

## 第7章 夫の悲しみ

45 頁

(階級差と年齢差のある結婚のため、フェルディナントの父は苦しんでいた。息子を連れて、知り合いの貧しい老夫婦を見舞った後、自分の死後を思い、息子の行く末を憂いる父)

## 第8章 急な目覚め

51 頁

(ある晩、一家で地方のホテルに泊まったとき、隣室の大きな物音に目覚めるフェルディナント。母を挟んで、父が叔父に出て行けと大声を上げていた)

## 第9章 チフス 55頁

(冬、母が家から姿を消した後、フェルディナントはチフスにかかる)

## 第10章 子供の池で自殺した女性 60頁

(春の日、バルバラに連れて行かれた公園で、池に入水自殺した若い女性の話を聞く。この池のほとりは、母が最後にフェルディナントと会って抱擁した場所でもあった)

## 第11章 鏡と死 67頁

(7月、首都近郊の軍事演習を前にして大佐は体調を崩す。夜の街に出て気分を変えようと着替えて、鏡の前に立ち、顔色優れないわが身の鏡像に愕然とする)

## 第12章 一斉射撃 79頁

(急死した大佐の軍葬では、その長年の功を称え、将官待遇の一斉射撃が行われる。亡くなった父と姿を消した母は煉獄に行くのかと乳母に尋ねるフェルディナント)

## 第13章 巡礼教会の博物館 85頁

(バルバラと一緒に行った山中の巡礼教会の一室には、信者の様々な奉納品、金髪のお下げ髪、松葉杖、義足、コルセットなどが、博物館のように保管されていた)

## 第14章 山賊ヤネチェクと蛇と川 94頁

(南ボヘミアのバルバラの郷里で、彼女の甥のフランタと遊ぶ。ブナの森の洞窟を山賊ヤネチェクの住処と言い、道に這い出てきた蛇を殺し、川での水

浴の仕方を教えるフランタ)

第15章 日の終わり

104 頁

(船室でフェルディナントは幼い日の追憶に耽る。神父と一緒に食べたバルバラの手料理の昼食、午後草原に寝そべってフランタと、またその晩バルバラと、この地の学校に入って、このままずっと暮らせないかと話したこと)

第16章 駅での思い

112 頁

(バルバラの郷里から再び街に戻った、ある日の駅の光景)

第2の人生断片

第1章 アルフレート・エンゲレンダーと知性

123 頁

(寄宿神学校に入っていた19歳のフェルディナント、神学校の講義で奇妙なユダヤ人エンゲレンダーと知り合う。そして彼の議論を聞いて、医者志望に切り替える)

第2章 年代記

137 頁

(エンゲレンダーに語ったフェルディナントの経歴。母は出奔し、父は亡くなり、ほとんど遺産も無く、10歳で寄宿軍学校に入学するが、そこで宿敵シュタイドラーと対立する)

第3章 年代記続き

152 頁

(シュタイドラーの陰湿ないじめが続き、錯乱したフェルディナントは、軍事教官に飛び掛って退学処分になり、神学校に移る。14歳)

- 第4章 フェルディナント，街に出る 164 頁  
(6・7歳年長のエングレンダーの手引きで神学校を退学し，生活上の援助を受けて大学で医学を学ぶが，次第に二人の経済事情が苦しくなる)
- 第5章 認識票 175 頁  
(フェルディナントの苦学と困窮が限界に達したとき，第1次大戦が勃発する。予備軍幹部候補生として志願兵となり，同じ志願兵の元ルポルタージュ記者ローナルト・ヴァイスと知り合う。戦地に向かう前日，認識票を受け取る)
- 第6章 シャンペン 195 頁  
(列車で移動の途中に寄った兵站地で，ヴァイスと一緒にいくつかのカフェに出かけ，相客とシャンペン開けて議論し，酩酊する)
- 第7章 瀕死の馬 222 頁  
(到着した戦地でフェルディナントは，隊長の好意により，電信係となる。ある日，厩舎に砲弾が落ち，瀕死の馬の惨状を目にする)
- 第8章 霧に覆われた景色 231 頁  
(オーストリアとロシアの激しい砲撃戦の後，夕暮れとともに霧が流れる。ヴァイスが負傷する)
- 第9章 法王の幻想 244 頁  
(フェルディナントは少尉になり，中隊を率いて駐屯した土地で，エングレンダーと再会する。榴弾兵として招集されたエングレンダーは，軍隊にはまったく不向きで，苦労を重ねていた。ある日彼は，聖職者の先頭に立った法王が激戦地ヴェルダンに向かって平和の行進をする幻影を見る)

## 第10章 浴場のマイスター

261 頁

(駐屯地に設けられていた軍人用浴場で、フェルディナントは名手によるマッサージを体験する。そのマイスターは、かつて処刑人だったと語る)

## 第11章 軍務規則第1部, 第14節, 第97条, 第708項

274 頁

(敵側への逃亡を企てたとする3名の砲兵の死刑執行をフェルディナントの中隊に命ずる書類がその規定条文とともに届く)

## 第12章 永遠の反逆者

286 頁

(大尉として駐屯地の参謀を実質的に牛耳っていたのは、軍学校時代の宿敵ザイドラーであった。彼に面会して銃殺任務の免除を申し出るが、受け付けられず、議論の末に彼を床に投げ飛ばしてしまう)

## 第13章 処刑の道

300 頁

(一隊を率いて処刑場に向かうが、銃殺執行直前のフェルディナントの命令は、「縄を解け」、「駆け足、出発」だった。逃げる兵も逃がす兵も歓声を上げる)

## 第14章 前哨, フェルディナンドフカⅢ

316 頁

(フェルディナントは、抜き差しならぬ激戦地、フェルディナンドフカⅢに配され、塹壕戦の苦汁を嘗める。戦場で負傷し、ドイツ兵に救われる)

## 第15章 付き添い

335 頁

(入院したレムベルクの病院には、若く美しい看護婦のベアータがいて、しばしば話し相手になってくれたが、間もなくバルバラが看病にやって来て、毎日早朝から患者の眠りを見守るようになる。安らぎを得て、フェルディナ

ントの傷も快方に向かう)

### 第3の人生断片

#### 第1章 滅亡の晩夏

351 頁

(大戦末期のウィーンには、兵士があふれ、闇市が横行していた。2ヶ月前に退院して軍に復帰したフェルディナントの姿もそこにあった。彼は軍務で5時発の列車に乗るまでの時間をウィーンで過ごそうと路地を歩き回るうち、ヴァイスと再会する)

#### 第2章 影の国

362 頁

(ヴァイスの案内で、「列柱ホール」と呼ばれる天井の高いカフェに連れていかれ、その常連客に銃殺刑を拒んだ英雄として紹介される。芸術家、精神分析家、ボヘミアンの女性、新聞記者、文筆家、編集者、詩人などが、その「影の国」の住人であった。結局フェルディナントは5時の列車に乗らず、カフェに長居し、多くの刺激的な人物と知り合いになる)

#### 第3章 ゲプハルトと破壊

391 頁

(ゲプハルトは、精神分析の私講師であったが、現在はコカインを常習しながら二人の女性と共同生活をしている。父権社会の現状を辛辣に批判する彼の哲学にフェルディナントは強く引かれ、その晩、軍に退役を願う手紙を書き、彼の家に同居し始める。しかし、赤ん坊の泣き声とハーレムの乱雑な生活に辟易して、間もなく逃げ出し、その後独居生活に入る)

#### 第4章 神の蜂起

405 頁

(本来『神の蜂起』とは、博覧強記の編集者バーゼルが当時発刊した雑誌の



名前である。しかしこの章題は、手塩にかけて育てた女流文筆家が自分の手を離れて成長するのを見て惑乱したバージル自身の譬えでもある)

第5章 エングレンダーの使命 435 頁

(ある日の午後、カフェ「列柱ホール」の出口でフェルディナントは彼を待ち構えていたエングレンダーに出くわす。彼はこのカフェを好まず、そこに足を踏み入れるのを拒んでいたのだった。そして自らを精神的なキリスト教徒であり、キリストとイスラエルは一体であると主張し、その信念を共にするというジーモン・クルツをフェルディナントに紹介する)

第6章 不思議なラビの踊り 449 頁

(9日後にエングレンダーはクルツとともに再び現れ、フェルディナントを連れて高名なユダヤ人ラビを訪れる。3人を迎えたユダヤ教徒たちは間もなく座ったまま体を揺らし、踊り始める。その後ラビは鯀を2つに切り、頭のほうを残して、小さいほうをフェルディナントに与える。これはクルツが解釈したように、尻尾をキリスト教徒に与えよという比喩なのか)

第7章 生の戦慄 462 頁

(ゲプハルトのハーレムの女性がフェルディナントを訪ねてきた日、夕刊に、「大司教館に一人の狂人」という記事が載る。エングレンダーが大司教に面会を求めて暴れ、精神病院に送られたことを告げる記事であった。フェルディナントはすぐに病院に駆けつけるが、エングレンダーとは会えず、彼の行方は杳として分からなくなる)

第8章 雄鶏、アポロ 472 頁

(チェコ人の音楽家のアトリエで、ウィーン革命を準備する非合法政治集会

が開かれる。アトリエの一角を囲った鶏小屋では、アポロと呼ばれる雄鶏が雌鳥共に君臨していた。その晩興奮したアトリエの持ち主は、雄鶏と一緒に踊りまわって、警察が来るほどの大騒ぎをする)

#### 第9章 バビロンの幕間劇

497 頁

(数週間繰り返し集会を開きながら、集団で酒場を転転としていたある晩、集会が終わった部屋に一人の若い戦争未亡人が現れる。彼女を連れてきたバージルがゲプハルトと性愛についての議論を交わす中、酩酊し、興奮した集会参加者たちが、隣室で彼女と狂騒を繰り広げる)

#### 第10章 指導者選挙

514 頁

(11月2日の戦争記念広場の大会には、期待されたほどの参加者が集まらなかったが、演壇に上がって弁舌を振るった結果、ヴァイスとフェルディナントが革命軍事委員会のメンバーに選ばれる)

#### 第11章 せむしの小人

528 頁

(多忙なある日、フェルディナントは任務で赴いた駅でかつて厚遇してくれた元隊長と再会するが、首都の不穏な情勢に絶望した元隊長は拳銃自殺してしまう。その晩ひどい頭痛に悩まされたフェルディナントは、カフェに入って貧乏詩人クラスニーと会い、せむしの小人の民謡朗読を聞く)

#### 第12章 流血への叫び

551 頁

(ウィーンの軍司令部は、交渉によって赤衛軍の手に落ちる。過激分子が街頭での流血の実力行使を叫ぶようになり、11月12日に赤衛軍を国会に突入させる提案を行う。フェルデエナントはそうした動きに違和感を覚える)

## 第13章 追うものが追われる

577 頁

(エングレンダーから葉書が届き、そこには「私を追うな、君自身が追われているのだから」と書かれている。駅で宿敵ザイドラーと出会う。彼は低姿勢で一方的に話しかけるが、目立つ将校の服装をしていたため、兵卒の群れに絡まれ、追われる羽目になる。フェルディナントは彼のため金を出して、平服を調達してやる)

## 第14章 群集と唯一者

595 頁

(11月12日、数十万人の労働者国会行進の日、いくつかのグループが国会突入を試み、銃撃が始まるが、数人の死者と負傷者を出して、結局襲撃は失敗に終わる。フェルディナントは急にクラスニーに会いたくなり、カフェに入る。詩人が10日も姿を見せていないと聞いて心配した彼は、下宿、病院と訪ね歩き、搬送処分寸前だった遺体を発見して、埋葬料金を支払う)

## 第15章 乞食詩人の名前喪失

615 頁

(クラスニーの葬式にカフェの常連20人ほどが集まる。葬儀の途中で現れたバーゼルが追悼の辞を述べることになる。それは政治集会のときとは打って変わって、卓越したスピーチだったが、ただ詩人の名ゴットフリートをゴットホルトと繰り返し間違えた。その晩フェルディナントは、国会突入の首謀者の容疑で逮捕される)

## 第4の人生断片

## 第1章 突然の旅立ち

641 頁

(ウィーン11月革命から約3年後の夏、フェルディナントは大学に戻り、医者への道を歩んでいる。彼には大学生の恋人マリーがおり、医学博士になっ

たのを祝って、二人はレストランで食事をする。そこで語り合ううち、フェルディナントはバルバラの故郷に旅立つべきという結論に至る)

## 第2章 異郷への帰郷 654 頁

(翌朝、地方都市の小さなホテルからフェルディナントが出てくる。前の晩に国境を越えて自分が生まれた故国へ戻ったのに、見知らぬ国に足を踏み入れたような戸惑いを覚えていた。かつて6歳の時にバルバラと訪れた巡礼教会には相変わらず、松葉杖や義足などが陳列されている)

## 第3章 生きていたバルバラ 662 頁

(村の出口近くにあるバルバラの実家に行き、入るのをためらっていると、髭を伸ばしてすっかり農民風になったフランチが出てくる。バルバラは、既に75歳になっていた。彼女はフェルディナントに、ひたすら彼のために蓄えていたという金貨入りの袋を手渡し、料理ができ上がるまでの間、散歩をしてくるようにと送り出す)

## 第4章 金貨、深い昏迷、逃走 676 頁

(フェルディナントは川を目指して歩くが、その途中6月の空がにわかには掻き曇り、湿地帯にはまりこんでしまう。草の上でひとしきり気を失い、我に返った彼はバルバラの家には戻らぬ決心をし、駅で彼女に手紙を書いて出した後、ウィーンに戻る列車に乗り込む)

## 最終章 何処から？ 何処へ？ 685 頁

(第1章と同じ船内。豪華船アスワン号はペロポネソス半島の南端を航行している。夜遅くなっても船内がにぎやかなのは、映画撮影の一団が乗船しているからだ。寡黙な船医フェルディナントが席を立つと、ソーニンがそっ

とその後を追う。月夜の下、船医は船首近くの手摺に凭れて、海面を見つめている。そして、右手を伸ばし、何か白いものを海に落とす。…フェルディナントは既に36歳になっていた。彼は突然麻痺したような、ある種の発作的な感情に襲われて席を立ったのだった。間もなくその虫の知らせはバルバラの死を告げるものであったと確信する。そして彼女から預かっていた金貨、困窮時に一部だけ売った他はそのまま残してあった金貨を、海に沈める)

前に『ヴェルディ オペラの小説』でも見たように、有り余る着想の作家といわれたヴェルフエルには、さればこそかえって整然とした形式を求める意識は強かったようであり、もとより劇作家でもあった以上、作品構成に意を用いるのは当然であったはずである。この長編で採用された、全体を大きく区分した上で章に細分するという形式は、後の長編のいくつか、たとえば、3部構成の *Die vierzig Tage des Musa Dagh* 『モーゼ山の40日』や5部構成の *Das Lied von Bernadette* 『ベルナデットの歌』や3部構成の *Stern der Ungeborenen* 『生まれぬ者たちの星』にも採用されており、たしかに読者が長い物語を目次でざっと概観するためには好都合な工夫とも言えよう。しかし、これを見て端正な形式と感ずるのは一見した印象であって、少し仔細に見ると、かなりアンバランスな点も目に入ってくる。先ず、本論の最初でも述べたように、小説を大きく4つに分けた中で第4人生断片にはたった5章しかなく、他の区分に比べて章の数が少ない。次に、各人生断片中の章のページ数が一定せず、第1の人生断片の各章がいずれもきわめて短い。それに対して、第3の人生断片の各章は長く、ここだけでおよそ全体の半分近くのページ数を占めている。

これは、作家が特に書きたかった内容がこの第3の人生断片に集中しているからと考えるのが妥当であろう。作品の表題こそバルバラであるが、彼女が登場するのは主に第1の人生断片であり、それ以外は第2の人生断片第3章で主人公が寄宿舎から久しぶりに訪ねていく件くんだりと同じく第2の人生断片第15章で

負傷して入院した主人公を看病する件と第4の人生断片で医学博士になった主人公が報告に訪れる件の3箇所であるにすぎない。成人した主人公が激動の時代を生き抜く最も長い第3の人生断片に、彼女はまったく姿を現さないのである。おそらくバルバラは、主人公にとってと同様作家にとっても、必要が無ければ忘れていられるありがたい存在であったのかもしれない。ヴェルフェルはこの長編で乳母のバルバラを書きたかっただけなのではなく、むしろ自分の半生を振り返り、とりわけウィーンの11月革命における自分の行動を題材として小説の中に組み込みたかったのだと思われる。別の長編 *Der veruntreute Himmel. Die Geschichte einer Magd* 『奪われた天国、ある女中の物語』の主人公テータとは違って、この作品の中のバルバラはあくまで主人公あるいは作家の保護者であり引き立て役なのである。このちょうど10年後に発表された一見対を成すような作品と比較すると、小説としての完成度は作家29歳の作と39歳の作の違いは歴然としていると言わざるをえないが、一般読者が抱く好感度からすれば前者に断然軍配が上がるであろう。後者は確かに全体がユーモアのヴェールに包まれているとはいえ、偽善者・詐欺者たる甥の書簡と言説の小説に占める部分がかかなり大きいために、どうしても後味の悪さを拭いきれないのに対し、前者では歴史的な激動の時代の人生を辛うじて生き抜いた主人公に共感あるいは一種の爽快感を覚える読者がいても不思議ではない。文学としての視点と好悪の判断が必ずしも重ならないのは仕方のないことである。

本題の小説の構造に関するもうひとつ形式的な特徴として、最初の章題と最後の章題が、いずれも同一の「何処から？ 何処へ？」と書かれており、その記述が豪華客船の船医であるフェルディナントに焦点を当て、彼の観察者としてソーニンを配し、船内での二人の行動を追うという共通枠を持ち、それで全体を括る枠構造になっている点を挙げることができる。このソーニンなる作家兼精神分析家も、小説の最初と最後の章以外にはまったく姿を現さない奇妙な存在であり、いかにも小説技巧の必要から生み出された人物という印象が強い

が、これと似た例は後の小説 Jeremias. Höret die Stimme『エレミア この声を聞け』においても繰り返されている。すなわちここでは、最初の第1章から第3章まで、ユダヤ系のイギリス人作家であるクレイトン・ジーズと彼の幼馴染である女性ジャーナリストのドロシー・コーウェルとが、イスラエル旅行者として死海からエルサレムの神殿へと巡り、その神殿でジーズが癲癇発作で失神する一瞬の間に、時空を飛んで幻視した預言者エレミアの事跡を、第5章から第33章まで記し、最後のエピローグでようやく再び彼が目覚めるという構成をとっているのである。20世紀から紀元前6世紀までの時空をすっ飛んで、瞬きするほどの間に預言者エレミアの長い物語を経験するというこの形式に、ヴェルフエルは当初相当こだわったようで、この長編小説の書き出し部分は彼には珍しく凝りに凝った美しい風景描写の文章で始まっている。しかし、後になってその形式の不自然さが気になったのか、生前、妻のアルマにこの小説から前後の枠の部分を取り除くよう言い残したとされ、実際にそれを実行した本が1956年に出版されている。たしかにエレミアの生きた時代に最初から焦点を絞ったほうが単純な構成であり、読者は感情移入がしやすいには違いないが、それでも論者にはこの枠構造の形式を残した小説の方がずっと興味深い。

内容に目を転ずれば、『バルバラあるいは敬虔』という小説には、上述のように伝記的要素が多く含まれており、主人公のフェルディナントとエンゲレンダーが二人とも作家自身の分身であるばかりでなく、他の登場人物も当時の知名人がすぐそれと言い当てられるようなモデル小説になっている。先に各章の補足として括弧内に記した人物の中では、ローナルト・ヴァイスは日本でも韋駄天記者として知られたエゴン・エルヴィン・キッシュ Egon Erwin Kisch であり、バーゼルも当時高名な作家、翻訳家、批評家であったフランツ・ブライ Franz Blei であり、ゲブハルトはカフカの作品にも影響を与えたとされる精神分析家のオットー・グロス Otto Gross である。貧乏詩人のクラスニーはカフ

カの断食芸人のモデルとも言われる、やはり実在のオトフリート・クルツィツァノフスキー Otfried Krzyzanowski という詩人であって、フランツ・ブライは追悼の辞で実際に彼の名前オトフリートをオトマールと間違えたのだった。また彼らが常連だった「列柱ホール」といわれるカフェもツェントラル Central という名でウィーンに今も実在する有名なカフェである。このあたりの描写からすれば、ヴェルフェルは文壇小説あるいは週刊誌小説のような通俗小説を書く才能も十分に持ち合わせていたとすることができるであろう。

さらに、第2人生断片第15章で、戦場で負傷したフェルディナントがレムベルクの病院で知り合うベアータは、ヴェルフェルが南ティロルでのロープウェイ事故の後、プラハで恋に落ちたという看護婦のゲルトルート・シュピルクであろうが、第4の人生断片第1章で唐突に現れ、ベアータと同様小説からすぐに姿を消す女子大学生マリアにアルマ・マーラーの面影を見るとするとなら、いささか美化しすぎとも思われようが、この作品が実際は11歳年長のアルマと晴れて結婚した年に出版されたことを勘案すれば、自己および最も近くにいた人物に多少の粉飾を施すのは当然だったのかもしれない。彼女と結婚するために自分の半生を小説で示すという動機もこの作品にはあったに違いないからである。彼女が求めたユダヤ社会からの離脱についても、この小説の中でエンゲレンダーが狂気の果てに姿を消すという結末によって暗示しているようにも見えるが、この作品に限ってみればそうであっても、前後の作品との関連で言えば、ヴェルフェルは必ずしもユダヤ教を離れたのではなく、狂気の前のエンゲレンダーの如く、ユダヤ教とキリスト教とが不即不離の関係にあることを主張し続けたように思われる。その確信は1926年の劇 Paulus unter den Juden『ユダヤ人の中のパウロ』にも、また1935年の劇 Der Weg der Verheißung『約束の道』にも、さらにその1937年の長編小説『エレミア その声を聞け』にも、またアメリカに亡命してから発表した劇 Jacobowsky und der Oberst『ヤコボフスキーと大佐』にも現れているが、その典型的な例をさら



に2つ挙げて本稿の締めくくりとしよう。

ヴェルフエルは、『エレミア その声を聞け』と同じ頃、長編小説 *Cella oder die Überwinder* 『ツェラあるいは乗り越えたものたち』を構想し、かなり書き進んでいたが、結局それを完成させず、アメリカ亡命後1942年にその1章を書き直して短編として発表したことがある。元の小説での第9章の表題は、*Die Geschichte des Kaplans vom wiederhergestellten Kreuz* 「作り直された十字架、司祭の物語」であったが、短編では *Die wahre Geschichte vom wiederhergestellten Kreuz* 『作り直された十字架、真実の物語』とされ、そのいずれにおいても悲劇の若きユダヤ人ラビ、アラダル・フルストが次のように言う。

「私には分からないのです、司祭様、— とラビの言葉が響いた — なぜ教会は、ユダヤ人の改宗にかくも重きを置くのでしょうか。出世主義あるいは弱さゆえの改宗者の中に、ひょっとして2・3人本当の信者がいれば、満足できるのでしょうか。それでは、もし世界中のユダヤ人が改宗したら、どうなるのでしょうか。イスラエルは消えてしまいます。しかしそれとともに、神の啓示を唯一体験した真実の証人もこの世から消えてしまうのです。旧約聖書だけでなく、新約聖書もそれによって、エジプトやギリシアかなにかの神話のように、空虚で無力な伝説にすぎなくなります。教会にはこの恐るべき危険が見えないのでしょうか。すべてが崩壊しつつある今となっても？…私たちは相互に必要なのです、司祭様、でも一心同体というわけではありません。新約聖書のローマ人への手紙に、キリストを信ずる者たちはイスラエルの上に立っていると書いてあることは、私などよりきっと良くご存知だと思います。私は確信しています、キリスト教会が存続する限り、イスラエルは存続する、しかしまた、イスラエルが減れば、キリスト教会も減びると…」

このラビの言葉にある最後の確信は、短編では司祭の回想として、もう一度繰り返されており、話し手の司祭を通して作家ヴェルフエルがとりわけ強調し

たかったことだと思われるが、さらにもうひとつ『バルバラあるいは敬虔』から、この作家が抱懐したキリスト教会に対する期待を表現した文章を挙げるなら、それは第2の人生断片、第9章の「法王の幻想」であろう。そこでは、一兵卒として戦場で苦しむユダヤ人エンゲレンダーによって、キリスト世界の代表者たる法王が停戦のために行進する幻想が語られている。

「私には彼が見える。たった一人で先頭を歩いて行く。行くという言葉は間違っている。彼の歩みは、くず折れそうなよろめきと地上の浮遊との中間みたいなものに見える。ちなみに彼は裸足、誰もが裸足…、今や彼はローマの王ではなく、なによりも地上世界の正当なる長であり、冠も法衣も孔雀の扇も、そう、法王の指輪さえも置いて来ていた。輝いて見えるのは、身を任せている曲がった杖だけで、それが同時に王笏にも松葉杖にもなっている。身につけているのは、死と償いの白装束で、続く数千人も同じであり、敬虔なユダヤ人が贖罪の日に着るのと同じく、また神であると同時に敬虔なユダヤ人であったイエホシュア・キリストとも同じ格好だ。彼らは何日も前に、ヴァチカンを、あの大きな隠れ処を後にして来ていた。あれは、あの奇跡の朝の前の夜だったろうか。要職にある枢機卿たち、イタリアの全枢機卿、それにフランスやスペインの枢機卿も数人、会議に加わっていた。司教や高位聖職者も多数！中には傲岸な国家主義やさわどい戦争賛美の言辞をさんざん振り撒く者もいた。けれども、公会議の神秘的な掟にしたがう聖なる霊が、法王に乗り移ったとき、彼らの慢心は消え、身震いした。…そして彼は、机に積み上げられた書類や文書を全部引き裂き、足蹴にし、咽び泣きながら己が栄光を脱ぎ捨て始めた。しかし、そのときに引き裂かれたその世界の心にキリストが移り住み、老いたるベネディクトの胸中を若き苦悩と若き力が満たし、真なる代弁者として彼を立ち上がらせたのだった。…太陽が昇ったとき、彼らは指導者の後に続いて聖ペトロ広場へと出て来た。この出来事はすぐに町中に知れ渡った。民衆の波が押し寄せた。ある者は大口をたたき、利口な連中は冗談を飛ばし、最も利口な者は急

いで精神病院に電話した。けれどもベネディクトと従者たちはそれにかまわず、昔この永遠の都市に北の門があった場所へと歩いて行った。…それに続いて、各地の聖職者、司祭、助司祭、修道僧が何百人も集まり、その神聖な行進に加わった。同じことがどんな村でも、どんな市場でも、どんな町でも繰り返された。役所はなすすべも無かった。前線の将軍からはひっきりなしに電報で、いかなる犠牲を払っても行進を遮り、即座にヴァチカンに追い返すべしと言ってきた。こうした騒ぎによって、国民に厭戦気分が広がりかねないというのであった。しかし、将軍たちの陰しい電文も何の役にも立たなかった。なぜなら真実と生命に反する場所には、草も生えないからである。ベネディクトを逮捕すべく憲兵隊が派遣されたが、道端に跪くだけのことだった。ミラノまで来たときには、民衆はもう5千人にも膨れ上がっていた。戦時中の厳しい生活にもかかわらず、いたるところで女たちが大きなミルク鉢やパンの籠や果物桶を持って来た。さらに西に進むと7千人になった。3日前にフランスの国境を越えて、今や…中欧時刻12時35分に、ヴェルダン防御陣地の塹壕の間のあのあたりまで達して、…」

文中ベネディクトと書かれている法王は、時の法王ベネディクト15世であり、彼は1915年7月28日に戦争に反対する説教を発表するなど、停戦のために尽力した法王として有名であった。とはいうものの、この法王による反戦行進という事件は、いかにも現実離れしたロマン的な誇大妄想と思われたために、戦場で精神不安に陥っていたエングレンダーの幻視として語られたのであろうが、カトリックの代表者たる法王に対する信頼というか、要求というか、要するに現実離れした幻想をヴェルフエルは実際ひそかに抱き続けたらしく、彼の手書き資料を調査したユンクの伝記によれば、第2次大戦中の1933年春の日記メモに、「法王の大勅書がドイツの司教に発せられ、迫害は、ユダヤ人の過ちを一層かたくなにし、神の国を一層遠ざげるだけであることに注意が喚起されなければならない」と書き残されている由である（Peter Stephan

Jungk : Franz Werfel. Eine Lebensgeschichte. Frankfurt 1987 S. 210)。そうであるとするれば、キリストとユダヤとの共存という作家の思いは、『バルバラあるいは敬虔』の舞台となった第1次大戦中も、この小説執筆直後のアルマとの結婚後も、またこの日記メモを書いた第2次大戦中も不変だったと言えるであろう。カトリック信仰には限りなく近づきつつも、ユダヤ人とその宗教を決して見捨てないというのが、生前の彼のぎりぎりの一線だったのである（しかしヴェルフェルにはアルマの意志によって死後密かに洗礼が施されたとも言われている）。